

朴泰遠と今和次郎 —『半年間』と『新版大東京案内』を中心に—

牧瀬 暁子

<はじめに>

モダニズム作家として知られる仇甫・朴泰遠（1910～1986）が、日本の建築家・今和次郎（1888～1973）が提唱した<考現学>なるものに関心をもち、小説や随筆の中でたびたび言及し、また小説技法として作品に取り入れていたことは、従来知られてきた。しかし、朴泰遠がいつ、どこで<考現学>に出会ったのか、その接点は必ずしも明らかではなかった。

ところが、最近になって、この接点に関するあらたな事実が明らかになった。

2017年3月に東京で開催された研究会「解放期における朝鮮語教育と朴泰遠—在日と本国」の一環として、朴泰遠の東京留学時期（1930～31?年）の足跡をたどる「文学散歩」が実施されたが、その準備過程のなかで、従来注目されて来なかった、今和次郎編『新版大東京案内』（1929年）が浮上したのである。そして、この『新版大東京案内』の内容が、朴泰遠の東京留学時代を題材とする小説『半年間』（1933年）や『小説家仇甫氏の日』（1934年）などに「活用」されていることがわかった。

本発表は、これら『半年間』等の作品の中に『新版大東京案内』がどのように取り入れられているかを、具体的に検証することを一義的目的とする。その中で、そもそも今和次郎の<考現学>とは何か、朴泰遠は<考現学>の何に着目し、どこに惹かれたのか、また、今和次郎は朴泰遠にどのような影響を与えたのかを考察したい。

1. 朴泰遠の<考現学>への言及

朴が直接<考現学>（モデルノロジオ）に言及している例は次の四篇である。

まず、1933年のモダニズム小説「小説家仇甫氏の日」では、主人公仇甫が、自分は<モデルノロジオ>を怠って久しい、と言いながら、ステッキとノートを手にして京城を徘徊する。次に1934年の、李箱がモデルとされる小説「愛欲」では、友人、河雄（李箱）の逢引き現場を目撃した仇甫が、何しに来たと咎められると「考現学！」と大学ノートを振りかざしてみせる。同じく1934年の随筆「六月の憂鬱」では、「創作のために、古ぼけた大学ノートを持って街に出るが十分の徒歩路程も達することなく」喫茶店に逃げ込み、炭酸水を前にしてめくったノートには、例えばこんなことが書かれている、として「1931. 7. 26. 午後3時に、往十里駅の待合室の時計は午前

(或いは午後) 11時5分前を指したまま止まっている……。そして、1938年の随筆「擁爐漫語」では、「私がいつとき「モデルノロヂオ」—考現学というものに熱中したのは」作家としての想像力の貧弱さを補うためだった、と書いている。

以上からわかるのは、朴泰遠が<考現学>を実践し始めたのは1933年より前、少なくとも1931年以前であり、1938年にはすでに<考現学>は過去のこととして語られている。そして、朴泰遠にとっての<考現学>とは、習作のためにノート片手に市中を徘徊し、人々の生態などをつぶさに観察してノートに書き留め、小説に活かすということのようである。

2. 今和次郎の<考現学>

今和次郎による<考現学>が世に出た最初の著作としては以下がある。(現在は『考現学 今和次郎集1』(ドメス出版、1971年)などに再録されている)。

①『モデルノロヂオ(考現学)』今和次郎・吉田謙吉共編、春陽堂、1930年

②『考現学採集(モデルノロヂオ)』今和次郎・吉田謙吉共編、建設社、1931年

ところで、<考現学>の名称は、1927年、新宿紀伊國屋書店開店記念「しらべもの(考現学)展覧会」開催の際に発案されたものだという。そもそもは、1923年の関東大震災直後、壊滅した都市の庶民による復興過程に興味をもった今和次郎が<バラック装飾社>を吉田謙吉等と設立、その調査・記録が発端となり、『婦人公論』(1925年7月号)に「銀座風俗調べ」を掲載、さらに本所深川の貧民窟調査、山の手の郊外へと発展継続し、その結果を「しらべもの展覧会」として発表する際にエスペラント語で<Modernologio>としたという。この展覧会は大成功を収め、その成果をまとめて刊行したものが上記の『モデルノロヂオ』と『考現学採集』であった。それより一年早く出版された今和次郎編『新版大東京案内』(中央公論社、1929年)は、<考現学>そのものを謳ったものではないが、内容には<考現学>の実践が含まれている。

「現在われわれの眼前にみる生活のなかにある事象を対象として記録考究するというモットー」(「考現学総論」)が活かされていると見ることもできるので、この時期の今和次郎の考現学に関する出版としてはこれが最初とも言えよう。

3. 朴泰遠の東京留学体験

<考現学>が東京で評判を呼んだころが朴泰遠の東京留学時期と重なるようだが、彼がいつ、どこで<考現学>に出会ったかは定かではない。まずは留学の時期から確認してみよう。

学籍簿によれば、法政大学(予科・第2部)昭和5年(1930年)4月入学、6年3月一学年修業、6年6月、授業料未納により除籍となっている。成績表によれば、一学年(及

第)で、英語・国語(日本語)・漢文の成績が優秀で、第二外国語はフランス語を選択しているが、二学年の成績表は記載無しであった。

渡日時期は1930年3月と思われる。前年3月に京城第一公立高等普通学校を卒業しているが、1930.9.26『東亜日報』掲載の「片信」には、末尾に、九月一六日、夢甫、と署名しており、「13日に東京に到着した」が師への報告が遅くなった、と書かれている。13日は3月の13日であろう。ちなみに「夢甫」は、当時朴泰遠が使っていた筆名(号)であり、「片信」の宛先は従来、李光洙と思われていたが、朴泰遠の長男、朴一英氏によれば、盧山・李殷相だという【参考文献(7)】。さらに「片信」には、下宿先は、勧められた本郷は帝大・一高生に気後れするので避け、故芥川龍之介の住居のある田端にした、半年ほどして都心に進出したい、と記されているが、法政の学籍簿の記載住所は、東京府下戸塚町(現高田馬場)改明館となっている。

帰国の年月日は明らかではないが、朴一英が親族から聞いた記憶では、秋風が吹く頃に夏服を着たクボが突然帰省、すぐに自宅に帰らず本町通りで目撃されたというので、1931年3月の1年修了後、初秋まではしばらく東京にいたようであり、日本滞在期間は少なくとも1年半以上と思われる。

4. 朴泰遠が作品に描いた1930年代の東京

作品年譜によると、朴泰遠は東京滞在中と思われる、1930年4月から～1931年12月まで、夢甫名で『新生』と『東亜日報』に詩や随筆、評論、翻訳、などを発表している。翻訳はトルストイの民話や英語圏の作家の短編小説(ヘミングウェイ、オハーリヒー、マンスフィールド)だが、いずれも英語からの訳のようだ。また評論は朴泰遠名で、ソ連の作家の小説(蔵原惟人らの邦訳)を紹介している。これらは東京から原稿を送ったのか、帰国直後の仕事かわからないが、留学の成果といえるだろう。

一方、留学中の東京生活が描かれた作品は、以下のとおりだが、(1)を除いてすべて1933年以降、本名の朴泰遠で発表されている。

(1)「**나팔**」(ラッパ)(『新生』1931年6月号。夢甫の筆名で発表)

オイチニッ、オイチニッ、神田橋を通り、小川町へと五月の真昼の街路を行進する108人の兵隊たち。自分たちの味方とは思わずむしろ敵と思っている民衆の前で彼らは元気なく、数日前の「**메이저 데모**」で目撃した、力強く自信に満ちた労働者の行進とは正反対。彼らの去ったあとに、力ない喇叭の音が余韻として残っていた。(2)「**사흘 굶은 봄나달**」(三日空き腹、春の月)(『新東亜』1933年4月号)

浅草公園で野宿する朝鮮人失業者、ルンペンのチュンサム(春三)は、盛り場の華やかな消費文化とは縁がなく二日も飢えて空腹を抱えながら痩せ細った三日月を見上げる。故郷の京城で寡婦の母親が貧しいながら三月三日の自分の誕生日に餅を食べさせて

くれた幼い頃を回想するうち、酔っ払いが差し出した焼き鳥をもらい損ねる。

(3) 「半年間」(『東亜日報』1933.6.15～8.22) 挿絵も朴泰遠

朴泰遠自身ガモデルと思われる法政大学生のチョルスとカフェーの朝鮮人女給との恋愛を軸に、三人の朝鮮人の友人—大森に間借り住まいの売れない文筆家、崔、親の金を元手に雀荘経営をもくろむ趙、そして居所不明の苦学生、黄等が繰り広げる東京生活が詳細に描かれるが、連載は二か月余りで中断し、未完に終わった。

(4) 「小説家仇甫氏의 一日」(小説家仇甫氏の一日)(『朝鮮中央日報』1934.8.1～9.19)
挿絵は河戎＝李箱

若き小説家(無職のインテリ青年)仇甫が自宅を出てソウルの街をあてどなく歩きまわる。その半日の徘徊で出会った人と風景をJ・ジョイスの「意識の流れ」の手法を使いながら技巧的な文体で綴り、植民地都市における青年の鬱屈と倦怠、孤独を描く。母親が自分の結婚と安定した生活を望んでいることを意識しつつ、東京留学中の実らなかった恋の回想がフラッシュバックのように浮かぶ。

(5) 「딱한 사람들」(哀れな人びと)(『中央』1934年9月号)

家賃を滞納し、下宿で空腹をかかえながら、新聞の求人三行広告に目を走らせる二人の朝鮮人苦学生。求職が徒労に終るが、押し入れに隠したなけなしの一本のタバコを分け合う。

(6) 「芳蘭莊主人」(『시와 소설』一卷一号1936年3月)

不遇な芸術家たちのたまり場となっていた喫茶店の経営が行きづまり廃業を目前にした様子が描かれている。喫茶店の主は李箱を思わせるが、舞台は東京である。九人会の雑誌に載ったもので、全文がワンセンテンスの「長距離文章」で知られる。また副題に「星群中の 하나」とあり、次の作品『星群』を続編として構想されたようだ。

(7) 「郷愁」(『女性』1936年11月号)

留学生の主人公は、故郷で恋人だった女性が神田の朝鮮料理店「明月館」で妓生として働いているのに出会い、そのチマチョゴリ姿に郷愁を感じるが、密会場所が彼女の職場であるため、人々の視線を感じてさほど幸せを感じる事が出来なかった。

(8) 「星群」(『朝光』1937年11月号)

芳蘭莊廃業の日を描いた小説だが、登場人物は朝鮮人ではなく、「子爵」「晩成」「水鏡先生」「ウィリアム・テル」などとあだ名で呼ばれる日本人の若き芸術家たち。九人会のメンバーをなぞらえているようでもあり、芳蘭莊主人は、朴泰遠の親友、李箱とその妻を投影したのではないかとも思われる。李箱は、前作「芳蘭莊主人」発表の年に朴泰遠の制止をきかずに東京に行き、翌1937年4月に東京で客死した。

5. 小説『半年間』と今和次郎編纂『新版大東京案内』

朴泰遠の東京を描いた作品のうち、彼の留学体験が最も色濃く反映している小説は『半年間』である。朴泰遠は『東亜日報』連載予告（1933年6月14日）の〈作者の弁〉で、次のように書いている。

「半年間」とは、東京にいたときの「半年間」であります。作者はこの小説の中で、わが友人たちとの生活を描こうと思ひます。この計画を抱いて以来三年、今、機会を得てペンを執りました。（中略）

1930年10月から1931年3月までの東京の「半年間」、つまり、近隣郡部を編入して成った「新たな東京」以前の「東京」がこの小説の舞台になるであります。

挿絵は作者自身が描くことにします。それは何か理由があつてのことではなく、ひとえに自分の作品に忠実でありたいと、悩み考えた末のことです。

以上からわかるのは、朴泰遠自身の1930年～31年の東京体験を、三年後の帰国した時点で書いたということ。そして朝鮮の読者にこの過去の東京体験が伝わるように、自ら挿絵も描いたということだ。（なお、朴泰遠（筆名、泊太苑）が初めて挿絵を描いたのは、留学直前と思われる、初めての新聞連載小説「寂滅」（『東亜日報』1930.2.5～3.1中、後半の14回以降）であり、「半年間」は2度目にして最後となったが、あるいは留学中にスケッチをしていたかもしれない）。

ところで「新たな東京」以前の「東京」というのは何か。「新たな東京」とは、1932年10月1日、東京市が近隣82町村を合併し、それまで郡部であった品川、渋谷、豊島、足立、葛飾等々20区を新たに編入し、全35区となり、当時、「大東京」と呼ばれるようになったことを指す。つまり、小説「半年間」の舞台は「新たな東京」、「大東京」以前だったということだが、なぜ朴泰遠はこのことにこだわったのか？ここに今和次郎編纂の『新版大東京案内』が1929年に出版されていることが関係していると思われる。『新版大東京案内』は文字どおり「大東京」へと拡大発展しつつある東京の実態を捉えているが、「大東京と郊外」という章に断つてあるように、制度的には「大東京都制実施前」の東京なのである。その『新版大東京案内』を、朴泰遠は『半年間』執筆に当って参照し、随所に「活用」している。渡日の直前に出版されていた同書を朴泰遠は入手することができたはずである。あるいは初めての渡日に際し、東京の予備知識を得ようとしたのかもしれない。彼が留学中に同書を片手に東京を歩きまわり小説『半年間』を構想したのか、あるいは帰国後、執筆に当って同書によって東京の記憶をたどろうとしたのかはわからないが、いずれにしても朴泰遠の今和次郎との出会いは『新版大東京案内』が最初だったといえるだろう。

「半年間」には主人公チョルスとその友人の青年たちが東京のあちこちを歩きまわ

の様が描かれる。それは、まるで『新版大東京案内』を案内書として活用しているかのようである。震災後、急速な近代化をとげた新宿の様子を初めとして、カフェやダンスホール、麻雀荘、映画館、遊郭など享乐的な面が描かれる一方、昭和恐慌の貧困と朝鮮人蔑視の中で故国を思う姿も書き込まれている。チョルスの恋愛と苦学生の窃盗事件がどちらも結末を見せずに『東亜日報』連載は57回で突然中断したが、一年後、朴泰遠は『朝鮮中央日報』に連載した『小説家仇甫氏の日』に、東京での恋愛を回想の形で書き込んでいる。

次に、『半年間』(A)の記述のなかで明らかに『新版大東京案内』(B)を参照していると認められる顕著な例を見ていこう。

*引用抜萃の頁数は、『半年間』(A)は『박태원 중 단편소설 윤초시의 상경』(김은샘, 1991年)所収の「반년간(半年間)」(翻訳は発表者)、『新版大東京案内』(B)は、ちくま学芸文庫(上下巻、2001年)所収の復刻本による。

① 主人公チョルスと友人、新宿駅とその周辺を歩く

(A) 電車が新宿駅に到着した。彼らは電車を降りて地下道に通じる階段を下りていった。(中略)地下道の中は真昼のように明るかった。はち切れんばかりに群衆があふれ出て二人の後から後へと続き、競争でもするように速い足取りで傍らを、間を、先を争って通り過ぎて行った。 一日十八万人の乗降客を呑み込んで吐き出す、この日本一という地下道は朝から晩まで絶えず混雑しているのだ。 (『半年間』251頁)

(A) 新宿駅構内に一歩足を踏み入れてみよ。正確に四分の間隔を置いて到着する中央線電車。遠く信州、甲州などから客を運ぶ列車。東京市外を循環する山手線。そして流行歌にまで出てくる小田急一小田原急行。

かくして新宿駅は一日に十七万人の乗降客を呑み込み、吐き出す。

(『半年間』340頁)

(B) <新宿> 正確に四分の時をはさんで発着する中央線電車は、これは夫れぞれ数万の居住者を有する大久保、東中野、……更に吉祥寺、国分寺、立川まで伸びて、それらの居住者を一手に引き受けて運んでくる。汽車は遠く信州、甲州からの客を運び、山手線、小田原急行線が、それぞれの沿線住民を運び込む。これ等が四つのプラットホームへ集り、そこから潮の如く階段をなだれ下るこれが即ち新宿駅である。

早朝から深夜まで、こゝはまことに肩摩穀撃。最近の鉄道省の調べに依ると、乗降客数東京駅を凌ぐこと数万、即ち 一日の乗客が九万余、降客がまた九万余、合せて十八万余の人間が、あの長い明るいタイル張りの地下道を流れ通るのである。…この洪水を流す地下道はこれまさに日本一の地下道で、 (『新版大東京案内』上巻221頁)

(A) 彼らは群衆にもまれながら歩道の上を泳ぐように歩いた。しかも、歩道の上、一列

に長蛇の列をなしている夜店のせいでかなり歩きにくかった。(中略) 彼らはしばらく黙々と並んで歩いて行った。ほてい屋を過ぎると人波はそれほどでもなくなった。(『半年間』252頁)

(B) 露店は、浅草には及ばないが、銀座には負けないほどに並ぶ。しかも午後から夜更けまで並んでゐる。道路の幅は狭く、それへ露店が並ぶので、人道はまるで路次の如く狭い。そこを新宿駅から吐き出す十八万余の人波と、市電や徒歩で集って来た数万の群衆とがごっちゃになって往来…この雑沓も正に日本一であらう。

(『新版大東京案内』上巻226頁「新宿」)

なお、今和次郎・吉田謙吉著『考現学採集(モデルノロジオ)』(建設社、1931年)には、<新宿夜店一覧表>がある。

(B) デパートが四つ。三越、ほてい屋、新宿デパート、新宿松屋。現在の三越分店は、屋舎に狭隘を感じ、旧武蔵(野)館跡を買収して堂々たる新築中である。ほてい屋も増築完成、新宿松屋も最近評判がよい。これ等百貨店も、往来が雑沓してゐる如く、いつも雑沓してゐる。(『新版大東京案内』上巻227-228頁)

なお『考現学採集(モデルノロジオ)』(1931年)には、<盛り場新宿の飲食店分布図>があり、ほてい屋、松屋、武蔵野館などが図示されている。(別紙参照)

新宿については、次の記述もある。

(A) 震災前までは新宿は大したことの無い街だった。それは東京市外の一個のちっぽけな一ちっぽけな故に愛すべき一街にすぎなかった。(中略)

それがあの有名な関東大地震を経るや、突然急速な発展をした。新宿は震災にも焼けなかった。しかし震災後の新宿は決して震災前の新宿ではなかった。(中略)

百貨店が建ち、劇場が建ち、料理屋、カフェー、飲食店、待合、ダンスホール。

(『半年間』339~340頁)

(B) 新宿は震災にも焼けなかった。しかも日進月歩の勢ひでどしどし発展変化していくこと都下この右に出るものはなからう。(中略)

無数のカフェー、二つのダンスホール、(中略)

新宿こそは、都市と近郊と地方との交流作用から生まれた異常なる高速度発展市街の代表的サンプルである。(『新版大東京案内』上巻228~229頁)

② チョルスの友人は神田・神保町の古本屋街を歩き、『西部戦線異常なし』を買う

(A) 駿河台下から九段下まで電車の両側に古本屋がずらりと軒を接している。特に書生たちが好む街だ。

「どれ、ちょっと寄っていこう」

趙は一軒に入って行った。並べてある本をきよろきよろ見回すと、『西部戦線異常なし』

を手にとってジュノの方をふり向いた。

「これが近頃流行っているらしいな」

(中略)

趙は店員が立っているところに行った。

「いくらかな」

「ありがとうございます。七十銭です」

「五十銭にしてくれよ」

「だめです。この本はよく売れますから……どこでだって安くはお求めになれませんでしょう。定価は一円五十銭もしますから」

(『半年間』 287 頁)

(B) <書店街> 市電駿河台下から、九段坂下までの、神保町北神保町に亘る電車通りの両側を見て行くと、立ち並ぶ店といふ店が、殆ど古本屋で占められてゐるのに驚く。神田区でも目貫のこの大通りは、古本に明け、古本に暮れる観がある。(中略)

なにしろ明治大学、商科大学、中央大学、専修大学、その他独学を志す人々にとつての便利な私立校、受験予備校等々、市中でも稀な学校集中の区だけに、この古本屋街の殷賑も想像するに余りあらう。(『新版大東京案内』 下巻 53-55 頁)

なお、『新版大東京案内』 下巻 54 頁掲載の写真「神田神保町通りの古本街」には入り口に立てた看板に「古本何でも高く買います」とあるが、これは東亜日報連載の『半年間』の挿絵とそっくり同じである。(別紙参照)

また、『西部戦線異状なし』(E・M・ルマルク著、秦豊吉譯)については、『新版大東京案内』 47 頁に、中央公論社の出版広告として近刊一覧表の筆頭に掲げられているほか、昭和四年発行の中央公論社版には奥付の後に付録として一面広告が載っているが、いずれも「定価壹圓五拾銭、送料内地十二銭、鮮・満・臺・樺十八銭」となっている。また、後者の宣伝文は、「獨逸では八十萬部を売り盡し英國で二十萬佛國で三十萬米國で二十二萬部賣られた、(1月発行8月末現在)今や全世界は此の書の話で持ちきり、到る處で物議の種となつてゐる。」と太字で強調している。

③ チョルス、新宿の武蔵野館で女友達と映画を見ているところを友達に目撃される。

(A) 車が武蔵野館前に着いた。彼らは入り口に入り、しばし目で空席を探した。(中略) ジュノは趙を見て、あれは誰だったかなーとたずねた。

「キム君さ。チョルスだ」

(中略)

スクリーンでは、漫画のトーキー映画「ミッキーマウスの冒険」が観客の微笑を誘っていた。

(『半年間』 301~303 頁)

(B) 近来までバラック建てときまっていた映画館が本式の鉄骨鉄筋コンクリート造の耐火建築となつて現はれるに至つた事は著しい。そのうち最も新式の館は新宿武蔵野館であると云へよう。(『新版大東京案内』上巻 88 頁)

昭和二年といふに映画常設館が、市内と近郊を併せて既に二〇二あつた。これが十年前(大正五年)にはたつた六十八と云ふのだから、ざっと三倍の騰貴! トーキ! つひにそれはトーキーにまでに發展した。

「ゆうべ、邦楽座のトーキーの帰りにさ、銀座の不二屋でね。びつくりしちや駄目よ、あたし P さんに遇つちやつたのよ!」

「まあ! 奇蹟って多いものね、妾もゆうべ武蔵野の廊下よ、断然彼をつかまえちやつたのよー」

何と「武蔵野の廊下」は壯観ではありませんか。……

有楽町の邦楽座、新宿の武蔵野館、一この二大常設館は、最近映画界のパラマウント系カルテルの二重奏である。(『新版大東京案内』上巻 262-263 頁)

なお、武蔵野館のモダンな内部を写した写真は上巻 255 頁「享樂の東京」の扉写真に使われている。そして、そっくり同じ構図のスケッチがスクリーンに映し出されたミッキーマウスの絵を配して『半年間』連載第 28 回の挿絵になっている。(別紙参照) また、武蔵野館の外観は『半年間』連載第 27 回の挿絵になっているほか、『小説家仇甫氏の日』の挿絵にも同じ構図で仇甫の連れとおぼしき女性の姿を配して描かれているが、これは河戎(李箱)の筆による。そしてこれら上部に MUSASHINOKWAN とローマ字で飾られた三階建てビルの外観は、『新版大東京案内』上巻 267 頁の写真「高級フアンの集る映画殿堂武蔵野館」とそっくり同じなのだ。(別紙参照)。

④ チョルス、友人の金策のため神楽坂の喫茶店に行く。

(A) 二人は電車を渡り、神楽坂の胸突き八丁の坂を上って行った。ソウルの本町通りをうず高くしてみたら、それは「神楽坂」を彷彿とさせるであろう。

しかしもちろんここはソウルの本町通りよりいささか繁華だった。一九二九年九月の或る日の正午に作成した、この通行人分析表によれば

学生が 48% 青年が 9% 店員が 8% 中年が 7% 下女が 6% そして一般家庭の婦人、労働者、子供たち、妓生、軍人、……その他—こういった順位である。

それこそ、採集時間が学生たちが多くうろつく正午だったということも考慮すべきだろうが、ともかく学生たちが用も無くうろつくのにかけて、この街以上の場所はあるまい。そして彼らは地理的關係でほとんど大部分が法政大学生であった。

(『半年間』 327 頁)

(B) 「神楽坂」は、『新版大東京案内』上巻 215 頁に「盛り場」の章として銀座、浅草、

新宿と並んで詳述されている。

神楽坂の「通行人分析表」については、『新版大東京案内』上巻 249 頁に、【盛場の人出分析表】として、人形町・道玄坂・新宿・銀座等々の人出が棒グラフが表示され、昭和四年（1929 年）秋に於ける各盛場の特徴を分析した説明が加えられている。これこそ今和次郎の〈考現学〉実践であるが、『半年間』では、この棒グラフの数字（通行人数の割合）をそのまま使っているが、「芸者」を「妓生」に、「女中」を「下女」などと「翻訳」している。

また、『新版大東京案内』の文章……「神楽坂は、採集時間が丁度昼時であつたせゐるものでせうが学生のうろつきが著しい（中略）神楽坂の婦人の少いのは正午頃のためで、（中略）女中の多いのは待合の女中さんで、（中略）盛り場にひらひらする芸者の比率は、これらで見ると一パーセントから二パーセント位のものです」という説明のうち、朴泰遠は学生の部分を小説に取り入れている。ここでは、朴泰遠は今和次郎の〈考現学〉をそっくり「拝借」したといえるだろう。（別紙参照）

⑤ チョルス、女給のミサコに強引に誘われ、ダンスホールに行く。

(A) 「十時三十五分。すぐ行きましょ。チョルスさん。あと二十五分しか残っていないから……」

「どこに行くの？」

「ダンスホール」

（『半年間』 359 頁）

(B) ……あんまり踊るので、ダンサーの臍脂の扱帯(しごき)が緩みはしないかと、たゞ見てゐてさへ妙な気になつてくるダンス・ホールは、確かに若い人々にとって、類ひのない歓楽郷である。……ビール一本飲む金があれば人の前で堂々と女と手を触れ合つて、何分かの間といふもの誰れ憚らず踊り狂ふことが出来るのだ。……

大概ダンス・ホールは、入場料として五十銭を取るが、切符を買へば勿論これは払ふ必要がなく、ダンス代としては蓄音機をかけて踊る。昼が一回十銭、そして夜はジャズがあるので二十銭を取つてゐる。二十歳前後の若いダンサー達は、毎日午後の二時から夜の十一時迄、汗と香水と煙草の渦巻の中で、男の胸に抱かれて踊りつゝけなければならぬのだが……（『新版大東京案内』上巻「享楽の東京」 287-290 頁）

朴泰遠は、『西部戦線異常なし』は実際に買って読んだのだろうか、武蔵野館には行ったようだが、ダンスホールや遊郭にはほんとうに行ったのだろうか？ 実際の体験を『新版大東京案内』で裏付け、脚色したのか、あるいは『新版大東京案内』を熟読して構想を練り上げたのか。どっちにしても『新版大東京案内』なしには「半年間」は書けなかったと

思われる。なお、『新版大東京案内』は「半年間」のみならず、東京を舞台とする1930年代の他の作品にも取り入れられている。

ところで、朴泰遠は「半年間」において、このように今和次郎の〈考現学〉を「借用」「活用」しているばかりではなく、自らも〈考現学〉を実践している。

例えば、チョルスが女給のシン・ウンスクから受け取った葉書の文面を四角で枠どりして本文に書き込み、なおかつ挿絵に描いているが、これは視覚的情報をそのまま伝えるもので〈考現学〉でよく用いられる手法である（『半年間』332頁。別紙参照）。

また、新宿駅の伝言板に白墨で書かれた伝言を日本語のまま（朝鮮語訳をつけて）書き写している。それは、チョルスが待ち合わせ時間より早く駅に来て閑つぶしに伝言板を眺めながら、それを書いた人々の不可解な「事情」に興味を抱く場面である。

—野田君 ゲルトなし。明後日までマテ。H。

フフン！ と、チョルスは失笑した。

—松竹梅 七圓五十銭、OK ウドン。

何のことやら、わからぬ。

—黒白。○○戦線異状なし。10時 會はう……

（『半年間』341頁）

といった具合だが、後に「キケンだ。よせ。絶対に。よせ。ミルク」という伝言をみつけては、それがチョルスの行動への警告のように思われる、という風に巧みに小説に取り入れている。

また、別の例では、チョルスらが神保町交叉点近くの「朝鮮食堂」に入って夕食をとる場面で、壁の貼紙三枚を本文中に書き取り、挿絵にも描いている（『半年間』290頁。別紙参照）。それは、『東亜日報』と『朝鮮日報』の講読申込みを本食堂が取次ぎます、というものと「三千里 十月号 出来」、そして、「朝鮮同胞のご愛顧に感謝し」廉価にてご下命を待つ、という洋服店の長々しい広告文（いずれも漢字混じりハングルによる）である。在日同胞の生活を垣間見せる故国への報告ともいえるだろう。

このような記述や挿絵を具体的に書く（描く）には、朴泰遠はカメラならぬノートを持ち歩いて〈考現学〉を実践していたのであろう。こうして、子細に観察し、スケッチし、それを作品に反映させるという〈考現学〉的手法は、「半年間」以降も続いたのである。

6. 朴泰遠と今和次郎

『新版大東京案内』の奥付には、今和次郎の名前は編纂代表者となっている。執筆者名は明らかではないが、大宅壮一ら数人の共同執筆だという。今の執筆は、「盛り場」と「東京生活百態」の二章だというが、今の友人たち考現学グループが参加していることがうかがわれ、随所に考現学的な発想と視点がある。それは「盛り場の人出分析表」や「銀座の

カフェ、飲食店」分布地図だけではない。東京全体を読者に分かり易く案内しようと、東京の局部から見出されるあらゆる現象を蒐集している。「内面種々相も明あり暗ありである。ピンからキリまでの生活諸相、生産、事務、慰安、娯楽、墮落、犯罪の一系列、交通機関の事故、学生の右傾左傾、勿論政党の夫々…人間世界の拡大鏡覗きの現実の光景がである。晴れやかであり、陰惨である。…人か機械か、人か人形か、人か動物か、また何物か、と指点されるこの生活、活きた光景がそこにある」(上巻 39 頁「今日の東京」)のである。

そこには人間のありとあらゆる行動を写し、採集したいという意欲があり、なに事にも囚われないという闊達さとユーモアがあり、そして同時代を生き生きと生活する人々への信頼がある。(下巻 367 頁、松山巖「解説 ゴム長と笑いを武器にした東京批評」)

それだけではない。社会的弱者、特に搾取される女性たちへのまなざしも特徴的だ。例えば「細民の東京」(下巻 227 頁)という章が設けられ、「東京市内外の細民数」、「どこに細民は集るか、その搾取者」に始まって「そのどん底生活ぶり」が詳しく調査されている。

「私娼街」(下巻 102 頁)では「このような暗黒の地獄界へ彼女達はどのように陥ち込んで来たか」と玉の井新地の私娼二百五十人に原因を調べたうえで「要するに、貧困が最大原因である」と結論づけ、「あまりに痛ましい無限地獄ではある。しかもこの無限地獄を極楽世界の如く心得て浮かれまはる男達が、日に一万五千人とは何とわが同時代人(コンテムポラリー)たちよ、少しは恥ぢを知らうではないか」と結んでいる。「カフェー」(上巻 277 頁)においても、「世間の日に増す不景気に反比例して最近の市内外に於けるカフェー、バーの膨張ぶり」を警視庁の昭和四年の統計まであげているが、「カフェーの洪水!しかもそこに働いている女給は、カフェー一万三千八百四十九人、バー千七百人を算へ、これらの大部分が客のチップを唯一の収入として街頭に戦っているのである」と指摘している。

「ダンス・ホール」(上巻 287 頁)でも「二十歳前後の若いダンサー達は、毎日午後の二時から夜の十一時まで、汗と香水と煙草の渦巻の中で、男の胸に抱かれて踊りつづけなければならぬのだが」、ひっきりなしに踊り続ける体力はないから、結局一日の実入りは、「五円稼げば上々である。男達が歓楽を一手に引き受けたやうな顔をして晴々しく踊ってゐる一方には、だから彼女達は、眼は火のやうに燃えてゐても口は灰のやうに冷めたく一種悲痛な陽気さで客の胸に抱かれて踊っているのである。」これら、彼女達の境遇に対する悲憤をこめたまなざしは朴泰遠の小説での女給の描き方からも読み取れるのではないか。

ところで、『半年間』では『新版大東京案内』(1929年)に言及してはいないし、『新版大東京案内』自体には<考現学>の文字は出てこない。朴泰遠が今和次郎の<考現学>に出会ったのは、やはり『モデルノロヂオ(考現学)』(1930年)か『考現学採集(モデルノロヂオ)』(1931年)であろう。そこであらためて今和次郎の提唱した<考現学>とは何か、また今和次郎とはどんな人物かを見てみよう。

私たち同志の現代風俗あるいは現代世相研究にたいしてとりつつある態度および方法、そしてその仕事全体を、私たちは「考現学」と称している。／われわれの考現学は、時間的には考古学と対立し、空間的には民族学と対立するものであって、もっぱら現代の文化人の生活を対象として研究せんとするものである。／それは現代人の生活ぶりのいつわらざる記録作成の仕事をやっていることになり、ささいな事項までを含めた現代生活の案内書の頁を作っていることになる。

（「考現学とは何か」（『モデルノロジオ』）からの抜萃）

考現学の研究対象は現代風俗（前に規定した意味の）である。そしてその研究方法は… 現前の風俗に直接ぶつかり、その観察、筆記、スケッチ、写真などで材料の採集をやりそれらを収集することから出発する。／つぎに、われわれの方法は統計に立場をおく。… さて、採集あるいは統計はいつも生活したままの状態で作るのを原則とする。

（「考現学総論」（『考現学採集』）からの抜萃）

以上において、繰り返される「生活」の文字（傍線筆者）が目を引く。

川端康成が『モデルノロジオ』について『改造』（1930年10月）に書いた文章がある。「廣漠に、そして複雑に、刻々生れ、また消えていく、現代世俗風俗に対して、「考現学者」が今後よりよく戦うことを、私は切に希望する。こういう本が作家にとってもいかにありがたいものであるかを知るからである」。作家、朴泰遠もまた、同じように感じていたのではなかろうか。

ところで今和次郎は元来建築家であり、柳田國男らとの日本の民家調査から出発していることは周知のことだが、朝鮮にも三度に渡って訪れている。白恵俊【参考論文（2）】によれば、まず1922年、朝鮮総督府の委嘱によって京城をふりだしに朝鮮各地を周り、集落・住宅・民具を調査した（このときのフィールド・ノートが最近、韓国で復刻されたが、建物に人物も書き込まれた詳細な図面やスケッチからは各階層、各地方の人々の暮らしぶりがわかる。【論文（6）】）二度目は1923年、満州建築協会・朝鮮建築会の共催による現地見学会に招聘され座談会に出席しているが、ここで注目すべきことは、（すでに建築中の）「総督府新庁舎は露骨すぎる」として、「被征服者を蹂躪するやうな一種の悲しみに打たれる」と大変勇気の要る発言をしていることである。三度目の朝鮮訪問は1944年、日本製鉄会社の土建協会の依頼で北海道や内地の炭鉱、製鉄工場などに朝鮮から連れてこられた朝鮮人労働者住宅の改善の方策を探る目的だった。仁川府の純朝鮮風中庭スタイルの長屋建てを訪ねたあと、これこそが在来の半島の風習にかなった朝鮮人労働者にとって住みやすいものだと認めたが、現実には生産性の向上を優先する住宅が要求され、

「内地と朝鮮」の「二本建て」の狭間で葛藤せざるを得ないまま終戦を迎えたという。なお、この三度目の朝鮮訪問の際、今を案内した金宥基は、かつて早稲田大学に留学し今の影響を受けて育った朝鮮人建築家であった【論文(6)】。また、日本の民家については、1935年から6年間、東北地方農山漁村住宅改善調査を行ったほか、東北セツルメント活動の拠点（本館）や実験住宅の設計や恩賜郷倉の基礎設計などの建築作品も残している。

これら、今和次郎の建築家としての仕事について、当時、朴泰遠が関知していたとは思えない。しかし、今が後に自ら語っている「生活への関心」—自分にはいわゆる建築としては民家を見ない傾向があること、生活が主体であって、生活のための工作物として民家を見ている、ということ—（今和次郎インタビュー「生活革命の現場で」、『展望』1968年3月号）、あくまで人々の「生活」に原点をすえたその姿勢は、朴泰遠の小説における人々の「生活」を重視した視点に通じるものがある。それは「半年間」にとどまらず、後の「川辺の風景」（1936年～）や、さらに越北後の歴史小説「甲午農民戦争」（1977～1986）における庶民や農民の描き方にも認められる。

一方、白恵俊は<考現学>を「方法の学」とみて、「川辺の風景」について次のように論じている。

考現学は、研究の対象も重要だが、その対象にどのような態度で接近していくのかに重点をおいた「方法の学」であり、その方法とは「対象を客観的に観察する」という「見る」側の立場、視線の主体としての自覚が必要である。「川辺の風景」には、それまでの<心境小説>とも定義された朴泰遠文学の私小説的な痕跡が全く見当たらず、考現学的小説作法がより進化した形で成立している。考現学的視点とは、私小説的な視点でもなく、すべてを見下ろすような外部者としての作家の視点でもない。対象との一定の距離を保つことによって、主観を持たず冷静に観察することこそ考現学の視点であり、「川辺の風景」はこの考現学の視線について探求した作品である。川辺の住民と一定の距離を持ちながら、彼らの生き方に何の価値判断も下さずに淡々と書く小説作法によって、「川辺の風景」は既存の文学とは異なる斬新な作品として評価することができる。

今和次郎と彼が提唱した<考現学>が朴泰遠に及ぼした影響、そして朴泰遠が今和次郎の<考現学>から何を得たかについては、今後の課題としてなお深める必要がある。

<参考文献・論文>

今和次郎編纂『新版大東京案内』、中央公論社、1929

今和次郎・吉田謙吉『考現学採集・モデルノロジオ』建設社、1931

『今和次郎集 1：考現学』ドメス出版、1971

今和次郎著、藤森照信編『考現学入門』筑摩書房（ちくま文庫）、1987

今和次郎編纂『新版大東京案内』上・下、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2001

今和次郎、他著『今和次郎 採集講義』青幻社、2011

『今和次郎と考現学 暮らしの“今”をとらえた<目>と<手>』河出書房新社、2013

- (1) 李敬恩「植民地朝鮮文学の東京表象—朴泰遠^{パクテウエン}の「三日空き腹、春の月」をめぐって」『比較文学・文化論集』17号、東京大学比較文学・文化研究会、2007
- (2) 白惠俊「考現学と日韓モダニズム文学」『文京学院大学外国語学部文京学院短期大学紀要』7号、2007
- (3) 강소영「박태원의 일본 유학 배경」『구보학보』6집, 구보학회, 2011
- (4) 강소영「식민지 문학과 동경(東京)—박태원의『반년간』을 중심으로」『일본어문화』19권 0호, 한국일본언어문학학회, 2011
- (5) 권은 「고현학과 산책자 박태원 : 창작방법의 비판적 고찰」『구보학보』6집, 구보학회, 2011
- (6) 富井正憲・金潤美・金龍河「今 和次郎と植民地朝鮮」『1920년대 콘 와지로 필드노트 (今 和次郎のフィールドノート)』서울역사박물관, 2016
- (7) 박일영『소설가 구보씨의 일생』문학과 지성사, 2016
- (8) 徐智瑛、姜信子・高橋梓訳『京城のモダンガール 消費・労働・女性から見た植民地近代』みすず書房, 2016
- (9) 마끼세 아끼코 「<구보 따라 도쿄 걷기 자료 2 박태원 작품 읽기>-도쿄 유학 체험이 반영된 「나팔」「반년간」「소설가 구보씨의 일일」을 중심으로」『구보학보』16집, 구보학회, 2017



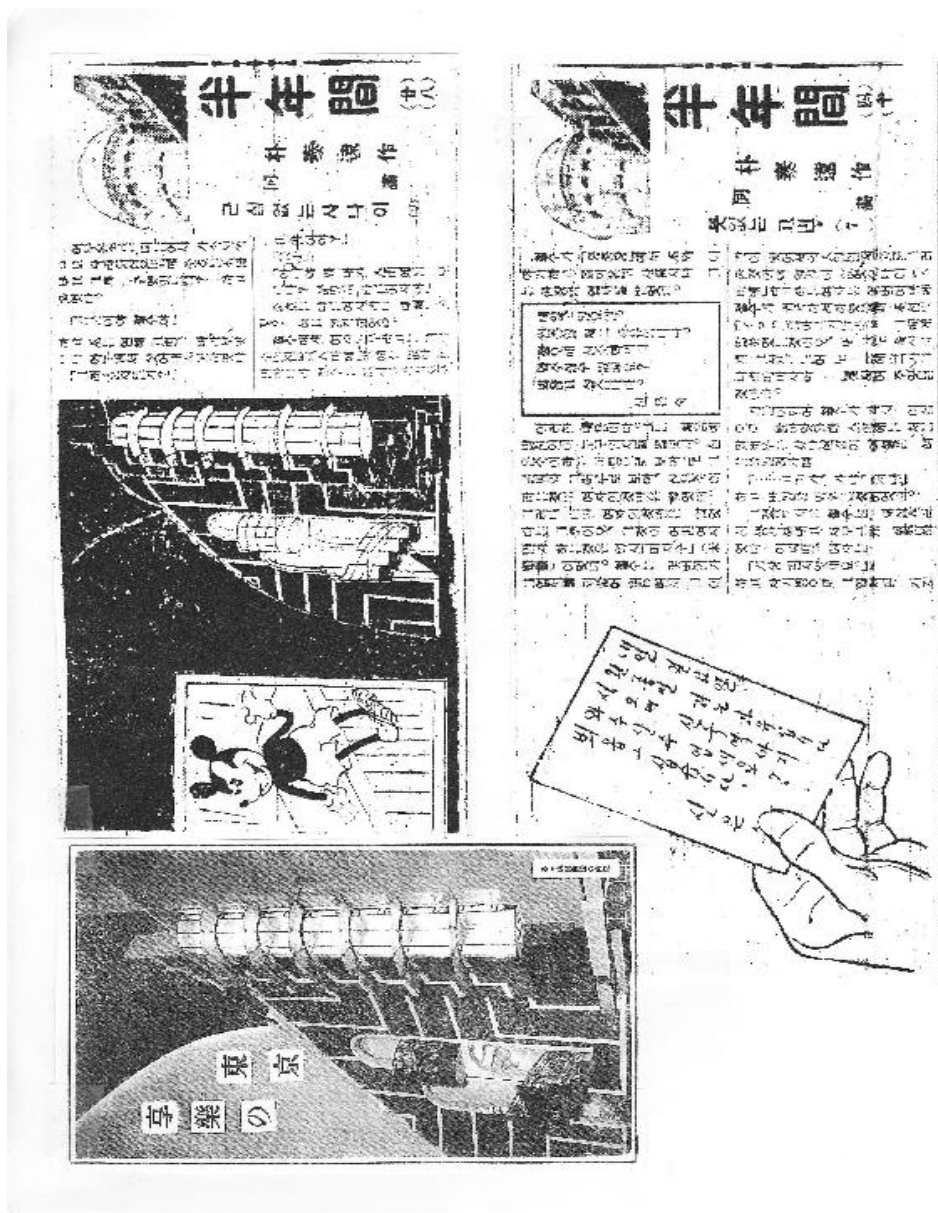
<東京新宿飲食店分布図> 昭和六年七月 (1931.7.7)

Y Iwata と **W·KON** のサインあり。ほていや ムサシノカン 朝鮮料理店 明月館等の表示あり。

『半年間』紙面と朴泰遠の挿絵

(左) 朝鮮食堂の幟、神保町古本屋の店先、屋台 (やきとり屋)

(右) 朝鮮食堂の内部 壁の貼り紙



(左) 武蔵野

館 内部：「享樂の東京」扉写真と朴泰遠の挿絵
 (右) はがき文面の粹取り本文と挿絵